

ソフトバレーボールの教材開発とその有効性に関する研究

～小学校第5学年の実験授業を事例として～

指導教官 尾形 敬史
勝本 真
発表者 則武 宏典
(保健体育専修)

keywords ; ソフトバレーボール、ネット型、生涯スポーツ

1、緒言

学習指導要領の改訂により、平成15年度から小学校の教材として「ソフトバレーボール」が導入された。このことから、中学年で取り上げる『ゲーム』の領域の学習内容として、地域や学校の実態に応じてバレーボール型のゲームを指導することができるようになり、高学年のソフトバレーボールへの系統的な学習計画を立てることができるようになったと言える。そして、小学校のソフトバレーボールがきっかけとなり、中学、高校、大学、一般とバレーボールに関わっていくことも考えられる。

小学校で取り上げるボール運動は、その特徴からゴール型、ベースボール型、ネット型に分けられ、今までは攻守が入り交じっているゴール型が中心であった。しかし、ソフトバレーボールは、攻撃と防御がはっきり分かれているネット型であり、両チームのプレーヤーが、それぞれのコートからボールを打ち合い、相手のミスを誘いながら攻防を展開し、得点を競い合う運動である。その特性としては、身体接触がないため男女一緒に学習しやすいことや役割を分担できるので、体格差や体力差を意識せずに誰でも参加しやすいことである。また、ソフトバレーボールとは、コートの大きさやネットの高さやボールの工夫がされ、バレーボールの最も重要な基礎技術である「パス」が簡単に、しかも安全にできてラリーが続き、だれもが、いつでも、どこでも手軽にできるというバレーボールの特徴が生かされていることである。そのため、ソフトバレーボールの最大限の魅力と言え、生涯スポーツとして、『老若男女が共有できる』ことである。ソフトバレーボールを通じて、「体を使うことの楽しさ」、「仲間と協力して目標を達成する喜びや技術を磨く面白さ」、「勝利の喜びや負けた悔しさの体験」などの機会をもたらすことによって、豊かなスポーツライフの創造と継続的实践への支援が期待されていると言える。

新学習指導要領で「ソフトバレーボール」が導入されて3年が経過した現在、「ソフトバレーボール」の授業では、どのように展開され、どのような成果が上げられているのかなどを検討することは授業改善に向けて、大きな示唆を与えるものと思われる。そこで本研究では、「ソフトバレーボール」を総括的に明らかにするため、現在行われている「ソフトバレーボール」の授業成果について分析・検討することを目的とした。

2、研究方法

分析対象：小学校4～6学年のソフトバレーボール授業。

分析方法：実際に行われている授業をビデオ録画しておき、そのVTR画像から、ゲームの様相を中心に分析・検討する。

3、現在までの経過と今後の予定

現在、城里町立石塚小学校で2005年11月に行われたソフトバレーボールの授業（8回）にボランティアとして補助に付き、授業での生徒の活動をビデオ録画した。その授業の中のゲームを中心として分析を行っている。今後、このデータを元に、分析方法の項目の検討を行い、場合によっては項目を設定し直して分析することも考えている。そして、小学校の協力を得て、ソフトバレーボールの授業のデータを集める予定である。

4、引用・参考文献

- 1) 高橋健夫編著(1994)：体育の授業を創る，大修館書店
- 2) 福原祐三他編(1997)：バレーボールの練習プログラム，大修館書店
- 3) 文部科学省(1999)：小学校学習指導要領解説―保健体育編―，東山書房
- 4) 杉山重利・園山和夫(2002)：体育科教育法，大修館書店，p 108－113
- 5) 宮内孝(2002)：「仲間と関係しながら楽しむ『キャッチ&スローバレーボール』の実践：バレーボールの本質的な楽しさを求めて」、『体育科教育』7月号，p 60－63
- 6) 伊藤達也・矢口奈穂子・澤田浩(2003)：「子どもたちが創るバレーボール：『ザ・アタック』の実践」、『体育科教育』2月号，p 34－38
- 7) 長島正明(2003)：「かかわり合いを深めるソフトバレーボールの授業」、『体育科教育』7月号，p 73－75
- 8) 田中俊一(2003)：「二年間のカリキュラムを見据えたソフトバレーボールの実践を通して」、『体育科教育』12月号，69－71
- 9) 前田路子(2004)：「ソフトバレーボールの楽しい体育授業」、『体育科教育』3月号，p 66－69
- 10) 矢藤優子(2004)：「今、子どもたちのコミュニケーション能力は」、『体育科教育』4月号，p 10－13
- 11) 日本バレーボール協会編(2004)：バレーボール指導教本，大修館書店